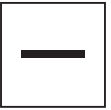


二〇二四年度・学力考查問題【国語】

(中学第二回)

注意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはっきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は14ページで□・○・△の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。



線あのおのひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 かぜ薬がきく。
- 2 学校で学んだことをふくしゅうする。
- 3 問題解決につとめる。
- 4 夏の暑さにへいこうする。
- 5 大変な苦勞があつただらうとすいさつする。



次の文章は、安壇美緒『金木犀とメテオラ』の二つの場面です。【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】を読んで、後の問いに答えなさい。

《登場人物》

- 宮田佳乃 みやた よしの 東京出身。寮生。優等生。
- 奥沢叶 おくざわ かなえ 北海道出身。優等生。首席入学。
- 森みなみ もり 北海道出身。
- 北野馨 きたの かおる 北海道出身。寮生。優等生。
- 牙島真帆 さしまま まほ 東京出身。寮生。
- 館林悠 たてばやし ゆう 東京出身。寮生。
- 羽鳥由梨 はとり ゆり 北海道出身。寮生。

宮田佳乃と奥沢叶の二人は、北海道に新設された女子中学校に通う中学一年生である。

【文章Ⅰ】

「真帆、なんかつけてる？」

その手前で由梨が立ち止まると、後ろの宮田はつかえた。

「なんかって？」

「香水とか」

すっごいいい匂いする、と由梨が鼻を利かせると、すぐにみんな真似をした。宮田も鼻から大きく息を吸うと、ひと筋、甘い匂いが黄色く香った。

金木犀だ、と眩くと、本当だ、と悠も言った。

何それ、とみなみが首を傾げると、その反応を見て真帆が笑った。

「ウソ、知らないの？」

「知らないよ」

「よく咲いてんじゃん、いい匂いがする木」

あるよね、と真帆が悠に同意を求める。私も知らない！と、被せられるように馨が言った。

¹「北海道には自生しない木なんじゃないの。寒いから」

宮田がぼそつと眩くと、いま咲いてんじゃん、と馨が突つかかる。

「人の手で植えたから咲いてるんじゃない？ 記念植樹したんだって、入学式で言ってたよ」

いい匂いだね、と奥沢が言う。奥沢もまた、金木犀を知らないようだった。

軋む扉を押して館内へ入ると、入学式の時よりもホールの中は狭く見えた。漆喰の丸天井に夕陽が反射して、どこかホールの中は朱い。

寄贈されてきたグランドピアノは、厳かな佇まいをしていた。

「宮田さん、ピアノっていつからやってんの？」

ステージによじ登った真帆が、脚をブラつかせながら尋ねる。

「二歳」

「早っ」

馨のオーバリアクションに構わず、宮田はピアノを覆っていた布カバーを取っ払った。鍵盤の蓋を開けて、息を止めて大屋根も持ち上げる。

ポーン、と一音、叩いてみると、ちゃんと調律されていた。

「ベートーベンみたいな弾くの？」

由梨が知っている単語で訊いた。

「弾いた年もあるよ」

「へー、すごい」

ギャラリーが多すぎるせいで、宮田はとづくにやる気をなくしていた。高さを調節してピアノ椅子に腰を下ろすと、みなみが再びさっきの鼻歌を歌い始めた。

「これ、弾ける？」

「なんとなくていいなら」

軽やかな手つきで宮田がピアノを弾き始めると、おお、とみなみが声を上げた。夜の葉に落ちる雨粒のようなメロディが、切ない旋律へと変わっていく。

マイ・フェイバリット・シングス。

私のお気に入り。

悲しいことがあった日でも、自分の大好きなものを思い浮かべれば、そんなに悪くない日だと思えてくる。そんな曲だった。

宮田にはどうしても、それがきれいごとと思われた。そんな風に思えるほど、好きなものなど自分にはない。悲しみにしたって、自分の中のどれが悲しみで、どれが悲しみではないのか、あまりわからないような気がした。

突然、不穏な気配に鳥肌が立って、宮田は一瞬、目線を上げた。

奥沢？

ステージで談笑している輪の中で、奥沢だけがじっと宮田を見つ

めていた。それは奇妙な光景だった。まるで平たい絵画の中で、そこだけが飛び出ているかのように。

※2 宮田はこの類の視線を何度でも浴びたことがある。

六啓館の最前列で。コンクールの会場で。

これは嫉妬だ。

けど何が？ と宮田は思った。授業中でも、テストの返却時でもない今、何故？

みなみのリクエスト曲は、そろそろ終わりを迎えようとしていた。もう一度宮田がステージを見やると、奥沢の目はまだ攻撃的にこちらを射ていた。

※3 そう思うのなら、やってやる。

ラフマニノフの《楽興の時》第四番。

いきなり宮田が前傾し、曲を変えて物々しい演奏を始めると、みなみの肩が跳ね上がった。

空気が一変して、肉厚のベルベットのよう^にに重厚な音楽がホールの中に響き渡る。鋭い楔を打ち付けていくかのように、宮田の指は躍動した。

気がつく^と、真帆たちも息を呑んでこちらを見つめていた。複数の聴衆の息づかいを感じながらピアノを弾くのはコンクール以来のこと^で、宮田の身体はぞくりと震えた。

※4 まだ、自分の指は衰えてはいない。まだ、やれる。
凍てついた土地を思わせる旋律を奏でながら、宮田は南斗にやって来た日のことを思い出していた。

たったひとりで、アイスブルーのキャリアケースを引いてきた日の

ことを。

はっと宮田がおもてを上げると、ステージの上では拍手が巻き起こっていた。

※3 「ビックリした〜ピアノ弾くって、こういうレベルだったんだ……」

「マジで宮田さん、すごくない!？」

由梨が興奮して目を輝かせている。真帆も悠も、いつものしらせ癖が嘘のように、はしゃいで手を叩いていた。驚いたことに、いつも自分に突つかかればかりの響が一番感動しているようだった。

まるで紙吹雪が空高く舞っているのを眺めているかのように、宮田はその新鮮な光景をしばし呆然と見上げていた。

※4 「あんた、やつばすごいわ」

傍らにいたみなみが、ゆつくりとハイタッチする。

その日、宮田に賛辞を送らなかつたのは、奥沢叶だけだった。

【文章Ⅱ】

「途中、どっかで昼でも食べてく？ マックとか」

騒音の中、みなみが大声で提案すると、そうしよっかー、と響も声を張り上げた。

どきつとしながらも奥沢は、つとめて平静を装った。肯定的に微笑みながら、焦りを心の奥底に閉じ込める。

「その辺りって、他になんか食べれるところないの？」

クリナーの電源を切ると同時に、宮田がぼそりと呟いた。すかさずみなみが釘を刺す。

「宮田のお気に召すようなもんは何もないよ」

「マックか……」

「贅沢を言うな中学生」

宮田がゴミをひと所に集めると、みなみがさっとチリトリを構えてその場にしゃがんだ。阿吽の呼吸だ、と奥沢は思う。

「奥沢はどうする？ 昼」

ゴミ箱にチリトリを傾けながら、みなみが明るく振り向いた。

「どうしよっかな。お昼ごはん、たぶんお母さんが用意してくれてると思うから……」

「そっか。じゃ、先にブックパレス行って、昼なし族だけマック行こ」
※⁵ 麗奈がそんな気の利いたことをしてくれているはずはない。お金がない、と言うのが嫌で、飛び出して来た方便だった。

奥沢は家のあれこれを、誰にも言ったことがない。

帰る頃、廊下にはもう他の生徒たちの姿はなかった。

「ブックパレス、結構広いらしいよ。みんなは探してる本とかないの」
階段を駆け下りながら馨が尋ねると、あたし今ないな、とみなみが答えた。

「宮田は？ あんた漫画とか読むの、そもそも」

からかい口調で馨が言うと、気だるげに宮田が口を開いた。

「漫画がどうっていうか、私、ああいうとこのはあんまり……」

その馬鹿にした物言いに鳥肌が立って、奥沢は宮田の背を凝視した。

「出たぞー宮田の潔癖」

「だって知らない人が触った本でしょ」

「んなこと言ったら図書館の本だって全部そうじゃん」

みなみが笑い飛ばすと、だから図書館もあんまり、と宮田が大真面目に言った。

「日焼けとか、黄ばみとか、なんか生理的に無理」

「これから買う、つつってる人の前で言うか!? それ」

その馨の怒りはいたってコミカルだった。わざとらしいみなみのため息だって、ただのふざけた相槌に過ぎない。

6 個人的な怒りに震えているのは、奥沢ひとりだけだった。まるでみずからの悪行がばれたかのように、寒気がする。

「奥沢って漫画とか読むの？」

「あんまり。探してる本ならあるから、探そうかな？」

「本か。なんかさすがって感じ」

愛想よく答えると、みなみが妙に感心した。何かを誤解されていることに気づきながらも、奥沢はそれを否定しなかった。

学校ではいつだって、こういう役でいたかった。善良で、頭が良く可愛らしい、完璧な女の子。それを演じ抜くためには、何だって厭わない。

「宮田さー、学校戻ったらピアノ弾きに行く？」

「一応」

校門前のスロープを下りて行く間、宮田とみなみの会話は嫌でも耳に入った。古本の怒りはまだ止まず、二の腕の鳥肌も消えない。

理想的な学校生活を手に入れることが出来た奥沢は、それに満足すると同時に、時々激しい嫉妬にも駆られた。

宮田のような、本物を目の当たりにする度に。

世界で一番、暗い場所はどこか知ってる？

それは、ステージを見つめているときの舞台袖。

まばゆい光を浴びて、素晴らしい演奏をしているほかの誰かを見つめているとき、わたしは世界で一番暗い場所にいる。

文庫本のページを捲ると、上から臭いが降って来た。暗く湿った物置のような、古い本の寂しい匂いだ。

奥沢は自宅の畳の上で、仰向けに本を読んでいた。

もう何百回読み直したかわからない、ぼろけた少女小説を。

小学生の頃に地域図書館で貰ってきたこの除籍本を、奥沢は大切に読んでいた。今どきの本ではないのが、絵柄を見ればすぐわかる。光沢を失くした表紙は角が取れ、紙には年月の色が染み込んでいた。

奥沢はクライマックス直前の、このシーンが好きだった。ピアノスト志望の主人公が、コンクール直前に舞台袖で孤独に蝕まれてしまう場面だ。自分とは何もかもが違う、恵まれた本の中の少女と、どうしてかこの瞬間だけは分かり合えるような気がするのだ。

手早くひとりの夕飯を終えた奥沢は、珍しく勉強以外のノートを開いた。誰にも見せたことがない、少女小説の挿し絵を模写するためのノートだ。十数ページごとに挟まれている挿し絵のどれも、何度も真似して描いていた。

大粒の瞳を描いているとき、奥沢はいつも真剣だった。絵に没頭している間、奥沢は虚構の世界にいた。ここは大ホールのステージの舞台袖であり、辺りはしんとして暗く、遠くから光が漏れていた。

8
少女が弾くグランドピアノの曲線を描いていると、ふっと嫌な場面が頭を過った。

私、ああいうとこのはあんまり……。

一度嫌なことを思い出してしまうと、次から次へと苦々しい気持ちがあみがえった。ファストフードが嫌いなこと。やたらに英語が上手いこと。そして何より、ピアノが特別弾けること。

宮田佳乃は生きていてだけで、奥沢のコンプレックスを刺激した。お金持ちの、優等生。

きっと彼女は恵まれている自覚などないのだろう。みずからの潔癖が誰かの羞恥を呼び起こすなんて、想像だにしていまい。彼女は彼女にとつての当たり前を享受し、そこから見える景色を見ているに過ぎなかった。

時刻はまだ七時半だった。麗奈はまだまだ帰らない。戸越と出かけた日の帰りは、いつも深夜を過ぎていた。絵を描くには格好の夜だったが、ずっと遊んではいけない。

夏休み直前の第二定期テストで、奥沢はまた二位だった。

一位は当然、宮田佳乃だ。次回は絶対に負けられない。

下ろしたての落書き帳は、ノートの角が尖っていた。シャシャシャ、トリズミカルなシャープペンの音と共に、頭の中の光る世界が紙の上に描き起こされる。

奥沢は絵を描くのが好きだった。

(安壇美緒『金木犀とメテオラ』集英社より)

- ※1 漆喰：石灰質の建築材料。
- ※2 六啓館：東京都内の名門進学塾。
- ※3 ラフマニノフ：作曲家の名前。
- ※4 南斗：作中に登場する地名。学校の所在地。
- ※5 麗奈：奥沢の母親。
- ※6 虚構：現実とは異なる世界。
- ※7 戸越：麗奈の交際相手の男性。

問一 —— 線1「『北海道には』入学式で言ってたよ」・3「『ピツクリした』感動しているようだった」・4「『あんた』ハイタツチする」とありますが、それぞれの場面から読み取れる登場人物たちの説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 宮田の発言に対してよく馨が突っかかることがあるが、馨としては宮田を拒絶しているわけではない。
- イ 悪気はないものの宮田の冷静で的確な発言は、いつも周囲の人間に不快な思いをさせている。
- ウ 由梨の特徴として、様々なものに感受性豊かに反応できる素直さが挙げられる。
- エ 宮田とみなみの間には、ピアノをきっかけとした周囲の表面的な好意とは異なる親密さがある。

問二 —— 線2「そんな曲だった」とありますが、ピアノの演奏をしながら「宮田」はどんなことを考えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 好きなものがあれば悲しいことも乗り切れるという歌詞と、雨粒の落ちるようなテンポの良さから切ない旋律へと変わっていく構成の矛盾が気になり、演奏に集中できない。
- イ 好きなものによって嫌だった一日が悪くない日になるのは、好きなものがある人の場合であって、好き嫌いがはっきりしない自分には上手く共感することができない。
- ウ 何が好きで何が嫌いかも分からない者がいる可能性を考慮せず、理想的なことばかりを主張する歌詞を思うと、自分を取り巻く友人や家族の性質と重なり不愉快である。
- エ キャリーケースを引きずりながら一人で地方の学校に来た時から、悲しさや嬉しさが分からなくなってしまった自分にとって、この曲の歌詞は絵空事ではない。

問三 「文章Ⅰ」から読み取れる「宮田」の人物像の説明として適當でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 奥沢に嫉妬の目を向けられ、その視線に慣れてしまっている自分自身に嫌悪感を抱くと同時に、久々に人前でピアノを演奏する感覚に興奮と手ごたえを感じている様子からは、自信も持っていることが読み取れる。

イ ピアノの鍵盤を弾いただけで調律の有無を判断したり、急なりクエストに応じて即座に演奏できたりする様子からは、ピアノに関する深い知識と豊富な経験を持っていることが読み取れる。

ウ ラフマニノフを演奏する中で、凍てつくような旋律と北海道を重ね合わせながら、キャリアケースを引いて単身でこの学園に入学してきたことを思い返している様子からは、強い孤独の感情を抱えていることが読み取れる。

エ 奥沢からの強い嫉妬の視線を向けられた際に、対抗して難しい曲の演奏を始める様子からは、敵意に触れても強気に立ち向かい、はつきりと自己主張するプライドの高さが読み取れる。

問四 ——線5「焦り」の内容の説明として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 手持ちのお金がない上に、買いたい本が無いことを正直に言うことに気が引けている。

イ 家に準備されている昼食をそのままにしたら母親に叱られるかもしれないと気後れしている。

ウ 金銭的に余裕がないという家庭の事情を知られかねない状況になり、気を張っている。

エ 唯一、生理的に受け付けない宮田とも一緒に行動する流れになり、気が立っている。

問五 ——線6「個人的な怒り」とありますが、この時の「奥沢」の様子を説明したのとして最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みなみや馨が宮田の潔癖から発せられる神経質な言葉を穏やかに受け止める一方で、裕福でない奥沢は馬鹿にされたように感じて憤っている。

イ みんなで楽しく本を探している最中に、わざわざその雰囲気（ふんい）を壊すような発言をする宮田の無神経さが、奥沢には理解できないでいる。

ウ 普段仲良くしているみなみや馨が、たまたま居合わせたために本屋に付いてきただけの宮田となぜか仲良さそうに話していることに嫉妬している。

エ 学校の友人といる時は善良で賢く可愛らしい優等生を演じていたのに、嫌いな宮田が目の前にいることで本性が出てしまいそうになり不安に思っている。

問六 —— 線7「大粒の瞳を描いているとき」虚構の世界にいた」とありますが、「奥沢」は「絵」を描くことで何をしようとしているのですか。くわしく説明しなさい。

問七 —— 線8「少女が弾くグランドピアノの曲線を描いていると、ふっと嫌な場面が頭を過った」とありますが、ここから読み取る「奥沢」の「宮田」に対する心情はどのようなものですか。その説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア ピアノの少女に似ていることからひそかに憧れていた宮田が、古本そのものを嫌うような発言をしていた様子を見て、一冊の古本を愛好しつづけてきた自分のこれまでが否定されたような気がして空しい。

イ 本屋での宮田の発言が、世界で一番暗い場所を共有するピアノの少女への自らの気持ちを侮辱しているように見え、しかもその宮田が、理想とするピアノの少女に近い存在であることが我慢ならない。

ウ 小さなころからくり返し読んできた小説の中のピアノの少女と、現実の世界の同級生である宮田が重なるのと同時に、恵まれた人生を送る宮田と、それとはほど遠い人生を送る自分とを比較してしまい苦しい。

エ ピアノというキーワードから本屋での宮田の発言を思い出し、小さなころから同じ古本を何百回も読んで楽しんでいて自分を、境遇も合わせて馬鹿にされたように感じてしまい悲しい。

オ 入学した時から何かにつけて周囲をいら立たせたり才能をひけらかしたりする宮田に対して、その存在感や能力を疎ましく思う一方で、憧れの感情も抱いてしまっている自分に気づいてしまい情けない。

問八 次は【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読み比べた五人の生徒たちが会話をしている場面です。本文の説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A「宮田は人目を気にしないで堂々と生きていけるけど、奥沢は人目を気にしながら生きていような感じがするね。」

イ 生徒B「【文章Ⅱ】の奥沢の視点ではそう見えるけど、【文章Ⅰ】では奥沢からの攻撃的な視線に気づいているから、宮田も人からの視線は気になるんだと思う。」

ウ 生徒C「【文章Ⅰ】でも【文章Ⅱ】でも奥沢は宮田に向かって常に攻撃的な視線をぶつけていて、嫉妬の根深さが怖いほどに伝わってきたな。」

エ 生徒D「不思議なのは、【文章Ⅰ】で宮田は奥沢からの嫉妬の視線に気づいているのに、なぜ自分が嫉妬の対象なのか分かっていないところ。自分が優秀である自覚がないところも奥沢が嫉妬するポイントなのかも。奥沢も学年二位だから十分優秀だけど……。」

オ 生徒E「見られていることには気づくけど、なぜ見られているのかは分からない宮田と、見ていることが見られている、ということに気付かない奥沢、という関係に整理することができそう。」

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生物としての人間は他の個体と協力することによって大きな社会を作り出しました。さて今後、人間はどうなっていくのでしょうか。

人間の協力性を可能にしたのは、人間のもつ「共感能力」だと言われています。つまり他の人の気持ちになって考えられるということですから。これによって他者の望むことを察知し、協力関係を築くことができます。この共感能力は人間が増えることに大きく貢献しましたが、最近の傾向として、この共感能力は人間のなかでますます強化されてきているように思います。つまり人間はどんどんやさしくなっています。

近年、ウシやブタなど動物の肉を食べることについてはしばしば問題視されるようになってきています。食肉の問題のひとつは温暖化などの環境負荷が大きいことだと言われています。たとえば100gのタンパク質を生産するのに、大豆であれば2.2㎡で済むところを、ウシを放牧した場合は164㎡と70倍以上の広い土地が必要になります。また冗談のような話ですが、ウシのゲップはメタンを含んでおり、このメタンが大きな温室効果をもたらしているとされています。

さらに食肉には倫理的な問題があると指摘されています。私たちと同じほ乳類であり、ある程度の知能をもったウシやブタを殺して食べることが許されるのかという問題です。私自身は肉が大好きですので、普段から何の疑問も抱かずにウシもブタも食べています。特に罪悪感を抱くことはありません。ただ、それはよくよく考えてみると、罪悪

感を抱かなくて済むようなシステムができ上がっているからのように思います。

たとえば、スーパーの肉売り場ではウシやブタの肉の切り身がきれいにパックされて並んでいます。そこに生物としての姿はもうありません。骨や血液、皮膚、毛、臓器など元の生物の特徴はきれいに取り除かれています。どこか人目につかない場所で生身の動物から肉を切り離す作業が行われています。マグロの解体ショーはよく見世物^{みせもの}になっていますが、あれは魚だからまだ許²されているように思います。ウシやブタの解体を見たい人はあまりいないでしょう。私たちは、自分と同じほ乳類を殺すこと、さらには解体することに少なからぬ抵抗感を持っていることを示しています。

これは人間という生物の特性からすれば当然のことです。私たちは少産少死の戦略を極めた生物ですので命を大切にします。それも自分だけではなく、他の人の命も大切です。それは人間が大きな協力関係の中で生きているからです。私が生きて増えるためには、他の人の協力がが必要です。したがって、人を殺すということには大きな抵抗感を持つようになるのは当然です。そしてこの抵抗感は、人間以外の人間とよく似た生物、たとえばほ乳類などであれば（人間ほどではないにせよ）適用されてしまうようです。

これは仕方のないことのように思います。ほ乳類の体のつくりは人間とよく似ています。ネズミでも、体温、皮膚、骨、血管があり、切ると血が出ます。内臓もほとんど人間と同じセットがそろっています。ふるまいも人間と似ています。イヌやネコを飼っている人であれば、そのしぐさやふるまいに人間らしさを感じることも多いでしょう。人

間の家族と同じように扱^{あつか}っている人も多いのではないのでしょうか。彼らは人間ではありませんが、やはり喜怒哀楽があり、好き嫌いもあり、可愛^{※1}くて時にやさしさも見せます。そのような動物を殺して食べることに忌避^{※1}感を持つのは当然のことでしょう。

ウシやブタも変わりありません。家でペットとして飼うことはあまりないのでよく知られていないだけで、牧場に行けば人懐^{ひとなつ}っこいウシがいますし、ブタをペットとして飼っている人もいます。彼らにも

A 人間と同じような喜怒哀楽があることでしょう。

B そうし

たウシやブタの人間らしさを知らないおかげで、平気で食べることでできているのかもしれない。 **C** 小型のウシやブタがペットとして広く飼われるようになったら、 **D** 人間はウシもブタも食べられ

なくなるのではないのでしょうか。そこまでいなくても、自分が家族のように大事にしているイヌやネコと、今晚のおかずのウシやブタは同じ生物だと一度でも意識してしまうと、どんどん食べにくくなっていくように思います。実際に近年、動物食を控^{ひか}える選択をする人が増えていくという統計結果もあります。私たちは少しずつ、他の動物へも共感の範囲^{ばい}を広げているように思います。

この人間のやさしさの拡張傾向は、やさしさの由来を考えると少し不思議ではありません。もともと人間が持っている共感能力は他人との協力を可能にしたことで人間の生存に貢献し、強化されてきたものです。したがって、他の人間への共感、世代とともに強化されていくべきです。

しかし、他の生物に対する共感、特に人間の生存には貢献していな

いように思います。私たちがどんなにイヌやネコに共感し、家族のように扱ったとしても、イヌやネコが人間の生存や子孫の数を高めてくれるようには思われません。過去の人類は、イヌは狩りのパートナーとして飼っていたようですし、ネコはネズミ捕りとして役に立っていたようですが、家族のように扱うよりは、³飢餓時には食料として食べさせてしまえるくらいの距離感のほうが人間の生存には役に立っただけです。ましてやウシやブタに共感してしまつたら、栄養価の高い肉という食料が食べられなくなり、むしろ生存には不利益になりそうです。食料になりうる生物に共感してしまうことは「Y」という増えるものの原則に反しているように思います。

このような共感範囲の拡大の原因は、まさにこの共感能力のおかげで高度に効率化した現代社会にあると思われまます。まず、過去の人間の社会と現代の人間の社会の大きな違いは、栄養を得ることは生存を決める要因ではなくなっていることです。2019年のデータでは、世界中で生産されている食料を世界の人口で割ると、平均して一人あたり毎日約2900 kcalの食料に相当しています。成人男性でも一日に必要なとするカロリーが約2600 kcalですから、この値は世界中のすべての人間に必要な食料は生産できており、適切に分配さえできれば（これが難しいのですが）⁴餓えて死ぬことはないことを示しています。

過去のどの時代においても、生物は必要な食料を得るために競争をしてきました。⁴栄養が得られればその分だけ増えてしまうので、常に栄養は足りない状態になります。ところが現代の先進国においては、⁵栄養は足りているにもかかわらず出生率は落ちていくという、過去のどの生物にもありえなかつた状況になっています。この特に栄養が余って

いるという状況をつくりだしたのは、他人どうして協力することができたからに他なりません。研究者が肥料を開発し、化学メーカーが肥料を作り、耕作に適した地域に住む人が作物を育て、輸送業者が消費者まで届けるという協力体制により、食糧生産と分配を効率化できたことによります。そしてこの協力体制を可能にしているのが、他人との共感です。他の人が自分と同じように協力してくれるという確信があるから、分業が成立しています。

このように大成功した共感能力は、私たちの中で強化されつつあります。先に述べたように私たちは協力することで成功してきたので、ますます協力的に、やさしくふるまうように教育され、日常的にプレッシャーをかけられています。このやさしさを適用する範囲に⁶線を引くことは容易ではありません。増えることに貢献するのは人間へのやさしさです。しかし、人間と同じように温かな体温を持ち、人間の幼児くらいの知能や体のサイズを持つイヌやネコが周りにいます。しかも人間がかわいらしいと思うような外見を持っています。この生物に人間の持つ強い共感能力が発揮されてしまうのはやむを得ないことかと思えます。むしろイヌやネコといった^{※2}愛玩動物はそうなるように（人間の手も入りながら）進化してきてみるとみならずできます。

こうして、人間が共感する対象はイヌ、ネコなどのほ乳類に拡張されていきます。鳥もペットとして人気ですので、鳥にも拡張されていくでしょう。ほ乳類や鳥類が仲間だとみなすようになれば、次は爬虫類や魚類となるのは避けられないでしょう。みんな同じように目、鼻、口があり、よくみればかわいいと言えないこともありませぬ。

現状で、日本では魚を食べるのがかわいいという声はあまり聞か

れません。しかし、日本ではよく見かける鯛の頭としっぽをそのまま使った活け造りも、冷静になってみると残酷に思えます。ほ乳類で同様なことは決してやらないでしょう。実際に海外の人から見ると活け造りは残酷な行為のように見られる場合もあるようです。そのうち活け造りやマグロの解体ショーが残酷なものだと敬遠される時代がくるかもしれません。

(市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』筑摩書房より)

※1 忌避感：特定のことからや人物をさらって避ける感情。

※2 愛玩動物：人が可愛がることを目的に飼う動物のこと。

問一 A D に入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使ってはけません。)

- ア むしろ
- イ もう
- ウ まさか
- エ きつと
- オ もし

問二 —— 線1「人間はどんどんやさしくなってきました」とありますが、ここでの「やさしさ」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分よりも他人の気持ちをお大切にしようとする事。
- イ 他の存在と協力する機会を求めようとする事。
- ウ 自分以外の存在の気持ちになって考える事。
- エ すべての生き物の命を自分と同じように大切にすること。

問三 —— 線2「まだ許されている」とありますが、そのように述べる理由について、「ウシやブタ」という表現を用いて分かりやすく説明しなさい。

問四 —— 線3「飢餓時には〳〵距離感」とありますが、この表現から読み取れることがらとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、これまでは結果的に状況に応じたやさしさを通して、食料の確保を可能にできた、ということ。

イ 人間は、必要以上にやさしさを発揮したからこそ、食の意識を高めることができた、ということ。

ウ 人間は、食料問題の解決に向けて、本来のやさしさの意味を修正しなければならない、ということ。

エ 人間は、今後の生存を有利に確保するために、かつてなかったやさしさを探し当てるべきだ、ということ。

問五 Y に入る表現として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 増えるための罪悪感の範囲が拡大する
- イ 増えるために必要な競争は敬遠される
- ウ 増えることを前提とした分配が効率化される
- エ 増えることに貢献する能力が強化される

問六 —— 線4 「栄養が得られれば」状態になります」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生物は、確保できた食料に応じて命を支え、そうして支えられた命が必要に応じた食料を確保する、という正比例の営みを繰り返してきた、ということ。

イ 生物は、生きるための十分な食料を得ようと争いさえ起こしてきたが、そうまでも空腹感を満たして安住することはできていなかった、ということ。

ウ 生物は、食料確保量を増やして繁栄を遂げたが、仲間の数が増えると、次には再び飢餓の状態に陥ってしまうものだ、という因果を繰り返してきた、ということ。

エ 生物は、限りある食料事情という要因ゆえに、仲間の数を十分に増やすことはできなかったため、限られた枠の中で絶滅の危機を逃れてきた、ということ。

問七 —— 線5 「栄養は足りているにも」落ちている」とありますが、その理由の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、栄養を得るための厳しい競争に勝ち残ってきたという苦難の歴史を忘れ、高度な体制のもと、命の誕生までも制御できるようになってしまったから。

イ 今日の間は、他者との共感に基づく分業を確立しているが、そのことによる効率的な栄養の確保は、そのまま生存を左右する要因にはなっていないと言えるから。

ウ 人間の過去の歴史においては、生存には影響のない食料を確保する経験を持っていなかったために、せっかくの余剰食料を生産の調整に向けて応用できずにいるから。

エ 現代の人間社会では、長年の苦勞の末に必要な量を上回る食料を蓄えることには成功したものの、その高い能力を出生率に反映させるには至っていないから。

問八 —— 線6 「線を引く」とありますが、その説明として次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア やさしさの適用範囲を狭めて、密度の濃い関係にこだわっていくこと。

イ やさしさを適用する範囲の拡張によって、分配を充実させていくこと。

ウ やさしさの適用範囲を歪めて、協力体制を極端なものにしていくこと。

エ やさしさを適用する範囲の限定によって、分業の可能性を閉ざすこと。

問九 —— 線7 「冷静になってみると残酷ざんこくに思えます」とありますが、その理由として適当あてあでないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 活いきの良さの半面、生きものとしての姿や命への「共感」要素が生々しく示されているものだから。

イ 鮮度を演出するための盛り付け方が工夫された一方で、やさしさ故のプレッシャーが促うながされてしまうものだから。

ウ 生きている姿を損そこなわずに目にできることで、自然愛好の感覚を特に満たし得る、「共感」不要のものだから。

エ 人間とは姿形が異なるものの、目、鼻、口を持つ生物としての存在を意識せずにはいられないものだから。

問十 —— 線X 「さて今後、人間はどうなっていくのでしょうか」とありますが、本文で述べられている食料事情をふまえて、あなたの考えを述べなさい。その際、「共感能力」を必ず引用すること。

【国語】

解答用紙 (中学第二回)

受験番号

.....

氏名

.....

得点

.....

一

あ

く き

い

ふくしゅう

う

めると

え

へいこう

お

すいさう

二

問一

.....

問二

.....

問三

.....

問四

.....

問五

.....

問六

.....

三

問一

A

.....

B

.....

C

.....

D

.....

問二

.....

問三

.....

問四

.....

問五

.....

問六

.....

問七

.....

問八

.....

問九

.....

問十

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....